

# 天鷲絨

石川啄木

青空文庫



理髮師とこやの源助さんが四年振で来たといふ噂が、何か重大な事件でも起つた様に、口から口に伝へられて、其午後ひるすぎのうちに村中に響き渡つた。

村といつても狭いもの。盛岡から青森へ、北上川に纏もつれて透うねう迤ねと北に走つた。坦々たる其一等道路（と村人が呼ぶ）の、五六町並木の松が断絶とだえて、両側から傾き合つた茅葺勝かやぶきがちの家並の数が、唯たった九十何戸しか無いのである。村役場と駐在所が中央程なかに向合つてゐて、役場の隣が作右衛門店、万荒物よろづから酢醬油石油たばこ、

鑊詰の酒もあれば、前掛半襟にする布帛きれもある。箸で断れぬ程堅い豆腐も売る。其隣の郵便局には、此村に唯一たったつの軒燈がついてるけれども、毎晩点火ともる訳ではない。

お定がまだ少ちひさかつた頃は、此村に理髪店といふものが無かつた。村の人達が其頃、頭の始末を奈何どうしてゐたものか、今になつて考へると、随分不便な思をしたものであらう。それが、九歳ここのつか十歳との時、大地主の白井様が盛岡から理髪師とこやを一人お呼びなされるといふ噂が、恰も今度源助さんが四年振で来たといふ噂の如く、異様な驚愕おどろきを以て村中に伝つた。間もなく、とある空地に梨箱の様な小さい家うちが一軒建てられて、其家が漸々やうやう壁塗を済ませた許りの処へ、三十恰好の、背の低い、色の黒い理髪師が遣つて来た。

頗るの淡白者きさくもので、上方弁の滑かな、話巧者じやうずの、何日見てもお  
 愛想が好いところから、間もなく村中の人の氣に入つて了つた。  
 それすなはが乃ち源助さんであつた。

源助さんには、お内儀かみさんもあれば子息こどももあるといふ事であつ  
 たが、来たのは自分一人。愈々いよいよ開業となつてからは、其店そこの大  
 きい姿見が、村中の子供等の好奇心を刺戟したもので、お定もよ  
 く同年輩おないとしの遊び仲間と一緒にやつて、見た事もない白い瀬戸の  
 把手とつてを上ねぢに捻り下ねぢに捻り、辛やつと少許入口すこしの扉とを開けては、種いろん々な  
 道具きちんの整然と列べられた室へやの中を覗いたものだ。少許開けた扉が、  
 誰の力ともなく、何時の間にか身体の通るだけ開くと、田舎の子  
 供といふものは因循なもので、盗みでもする様に怖おつかびつくな怯り、二寸

三寸と物も言はず中に入つて行つて、かはるがはる交代に其姿見を覗く。  
をかし訝な事には、すこし少許離れて写すと、顔が長くなつたり、ひらた扁くなつたり、目も鼻も歪んで見えるのであつたが、お定は幼心に、これは鏡が余り大き過ぎるからだと考へてゐたものだ。

月に三度の一日の日を除いては、（此日には源助さんが白井様へ上つて、お家うちぢゆう中の人の髪を刈つたり顔を剃つたりするので、）大抵村の人が三人四人、源助さんの許とこでたばこ苳を喫しながら世間話をしてゐぬ事はなかつた。一年程経つてから、白井様の番頭を勤めてゐた人の息子で、薄野呂などところからノ口勘と綽名あだなされた、十六の勘之助といふのが、源助さんに弟子入をした。それからといふものは、今迄ちかづ近き兼ねてゐた子供等まで、理髪店の店を遊場に

して、暇な時にはよく太閤記や義経や、蒸汽船や加藤清正の譚はなしを聞かして貰つたものだ。源助さんが居ない時には、ノ口勘が錢函から銅貨を盗み出して、子供等に餡麵麩あんぱんを振舞ふ事もあつた。振舞ふといつても、其实半分以上はノ口勘自身の口に入るのだ。

源助さんは村中での面白い人として、衆人みんなに調法がられたものである。春秋の彼岸には、お寺よりも此人の家の方が、餅を沢山貰ふといふ事で、其代り又、何処の婚礼にも葬式にも、此人の招かれて行かぬ事はなかつた。源助さんは、啻ただに話巧者で愛想が好い許りでなく、葬式に行けば青や赤や金の紙で花を拵へて呉れるし、婚礼の時は村の人の誰も知らぬ「高砂」の謡をやる。のみなら加

之ず、何事にも器用な人で、割烹れうりの心得もあれば、植木弄りいじも好き、

義太夫と接木つぎぎが巧者じやうずで、或時は白井様の子供衆のために、大だい奉ほう八枚張の大紙鳶おほたこを拵こへた事もあつた。其処此処の夫婦喧嘩けんかや親子喧嘩けんかに仲裁ちんさいを怠おろそらなかつたは無論の事。

左さう右みぎうしてゐるうちに、お定は小学校も尋常科だけ卒そとへて、子守こもりをしてゐる間に赤い袖口そでぐちが好きになり、髪かみの油あぶらに汚これた手拭てぬぐいを独ひとり自みづかりに洗あらつて冠かんむりる様ようになつた。土土用つちどようが過あぎて、肥料こえつけの馬うまの手綱てなづなを執とる様ようになると、もう自みづかづと男羞おとこづかしい少女心せうじよこころが萌もして来て、盆ぼんの踊おどりに夜よを明あすのが何なによりも楽しい。随まつて、ノ口勘のくちかんの朋とも輩わいの若わかい衆しゆが、無駄口むだぐちを戦いくさはしてゐる理髮師りはつしの店みせにも、おのづと見舞みまひふ事が稀まれになつたが、其頃そのときの事こと、源助げんすけさんの息子こゝろさんだといふ、親おやに似にぬ色いろ白しろの、背せのすらりとした若い男おとこが、三月さんげつ許もとりも



来てゐた事があつた。

お定が十五（？）の年、も少許すこしで盆が来るといふ暑氣あつぎ盛りの、踊に着的浴衣やら何やらの心構へで、娘共にとつては一時も氣の落着く暇がない頃であつた。源助さんは、郷里くに（と言つても、唯上方と許りしか知らなかつたが、）にゐる父親が死んだとかで、俄かに荷造をして、それでも暇乞だけは家毎いへごとにして、家毎から御饞別を貰つて、飼かひなら馴なした籠の鳥でも逃げるかの様に村中から惜まれて、自分でも甚いたく残惜しさうにして、二三日の中にフイと立つて了つた。立つ時は、お定も人々と共に、一里許りのステイシヨンまで見送つたのであつたが、其帰途かへり、とある路傍みちばたの田に、稲の穂が五六本出初そめてゐたのを見て、せめて初米の餅でも搗つく

まで居れば可いのにと、誰やらが呟いた事を、今でも夢の様に記憶おぼえて居る。

何しろ極く狭い田舎なので、それに足あしもと下から鳥が飛立つ様な別れ方であつたから、源助一人の立つた後は、祭礼おまつりの翌あくるひ日か、男許りの田植の様で、何としても物足らぬ。閑人の誰彼は、所在無げな顔をして、呆ぼんやり然と門口に立つてゐた。一月許りは、寄ると触ると行つた人の話で、立つ時は白井様で二十円呉れたさうだし、村中からの御饞別を合せると、五十円位集つたらうと、羨ましさうに計算する者もあつた。それ許りぢやない、源助さんは此五六年に、百八十両もおツ貯めたげなど、知つたか振をする爺もあつた。が、此源助が、白井様の分家の、四六時中しよつちゆうリユウマチで

臥ねてゐる奥様に、或る特別の慇懃いんぎんを通じて居た事は、誰一人知る者がなかつた。

二十日許りも過ぎてからだつたらうか、源助の礼状の葉書が、三十枚も一度に此村に舞込んだ。それが又、それ相応に一々文句が違つてると云ふので、人々は今更の様に事々しく、渠の万事よろづに才が廻つて、器用であつた事を語り合つた。其後も、月に一度、三月に二度と、一年半程の間は、誰へとも限らず、源助の音信があつたものだ。

理髪店とこやの店は、其頃兎や角一人前になつたノ口勘が譲られたので、唯一軒たったしか無い僥倖しあはせには、其間まが抜けた無駄口おきやくに華客を減らす事もなく、かの凸凹の大きな姿見が、今猶人の顔を長く見

せたり、ひらた扁く見せたりしてゐる。

其源助さんが四年振で、突然遣つて来たといふのだから、もう殆ど忘れて了つてゐた村の人達が、男といはず女といはず、腰の曲つた老としより人や子供等まで、異様に驚いて目を睜みはつたのも無理はない。

## 二

それは盆が過ぎて二十日と経たぬ頃の事であつた。ひるなか午中三時間許りの間は、夏もなかの最中にも劣らぬ暑気で、澄みきつた空からはそよ習との風も吹いて来ず、素足の娘共は、日に焼けた礫こいしの熱いのを

避けて、軒下の土の湿りを歩くのであるが、裏畑の梨の樹の下に落ちて死ぬ蟬の数と共に、秋の香かをりが段々深くなつて行く。日出前ひのでの水汲に素すあはせ裕はせの襟元寒く、夜は村を埋めて了ふ程の虫の声。田といふ田には稲の穂が、琥珀色に寄せつ返しつ波打つてゐたが、然し、今年は例年よりも作ずつが遙と劣つてゐると人々が眩こぼしあつてゐた。

春から、夏から、待ちに待つた陰曆の盂蘭盆うらぼんが来ると、村は若い男と若い女の村になる。三晩続けて徹よどほし夜に踊つても、猶踊り足らなくて、雨でも降れば格別、大抵二十日盆が過ぎるまでは、太鼓の音に村中の老としより人達が寝つかれぬと口説く。それが済めば、苟いやしくも病人不具者でない限り、男といふ男は一同泊とまりがけ掛ひがしで東

嶽<sup>だけ</sup>に萩刈に行くので、娘共の心が訳もなくがっかりして、一年中の無聊を感じるのは此時である。それも例年ならば、収穫<sup>とりのいれご</sup>後の嫁取婿取の噂に、嫉<sup>やきもち</sup>妬<sup>もち</sup>交りの話の種は尽きぬのであるけれども、今年のように作が悪くては、田畑が生命<sup>いのち</sup>の百姓村の悲さに、これぞと気の立つ話もない。其処へ源助さんが来た。

突<sup>いきなり</sup>然<sup>なり</sup>四年振で来たといふ噂に驚いた人達は、更に其源助さんの服装<sup>みなり</sup>の立派なのに二度驚かされて了つた。万<sup>よろづ</sup>の知識の単純な人達には何色とも呼びかねる、茶がかつた灰色の中折帽は、此村で村長様とお医者様と、白井の若旦那の外冠<sup>ゑをか</sup>する人がない。絵甲斐<sup>ひき</sup>絹の裏をつけた羽織も、袷も、縞ではあるが絹<sup>やはらかもの</sup>布物で、角帯も立派、時計も立派。中にもお定の目を聳<sup>そばだ</sup>たしめたのは、つつしりと

重い総革の旅行鞆であつた。

宿にしたのは、以前もと一番懇意にした大工の兼さんの家であつたが、其夜は誰彼の区別なく其家を見舞つたので、奥の六畳間に三分心の洋燈ランプは暗かつたが、入交り立交りする人の数は少くなく、潮しほの様な虫の音も聞えぬ程、賑かな話声が、十一時過ぐるまでも戸外そとに洩れた。娘共は流石に、中には入りかねて、三四人店先に腰掛けてゐたが、其家の総領娘のお八重といふのが、座敷から時々出て来て、源助さんの話を低声こゝろに取次した。

源助さんは、もう四十位になつてゐるし、それに服装の立派なのが一際品格を上げて、拳動ものごしから話振から、昔よりは遙かに容体づいてゐた。随つて、其昔「お前めえ」とか「其方そご」とか呼び慣し

てゐた村の人達も、期せずして皆「お前様めえさま」と呼んだ。其夜の話では、源助は今度函館にある伯父が死んだのへ行つて来たので、汽車の帰途かへりの路すがら、奈何どうしても通とほりぬけ拔ぬが出来なかつたから、突然ではあつたが、なつかしい此村を訪問したと云ふ事、今では東京に理髪店を開いてゐて、熟じゆく練れんな職人を四人も使つてゐるが、それでも手が足りぬ程いそ急そがしいといふ事であつた。

此話が又、響を打つて直ぐに村中に伝はつた。

理髪師といへば、余り上等な職業でない事は村の人達でも知つてゐる。然し東京の理髪師と云へば、怎どうやら少し意味が別なので、銀座通りの写真でも見た事のある人は、早速源助さんの家の立派な事を想像した。



翌あくるひ日は、各々自分の家に訪ねて来るものと思つて、氣早の老としより人などは、花莫蔭を押し入から出して炉辺に布いて、渋茶を一掴み隣家となりから貰つて来た。が、源助さんは其日朝から白井様へ上つて、夕方まで出て来なかつた。

其晩から、かの立派な鞆から出した、手拭やら半襟やらを持つて、源助さんは殆んど家毎に訪ねて歩いた。

お定の家へ来たのは、三日目の晩で、昼には野良に出て皆留守だらうと思つたから、態々わざわざ後廻しにして夜に訪ねたとの事であつた。そして、二時間許りも麦煎餅を噛りながら、東京の繁華な話を聞かせて行つた。銀座通りの賑ひ、浅草の水族館、日比谷の公園、西郷の銅像、電車、自動車、宮様のお葬式とむらひ、話は皆想像

もつかぬ事許りなので、聞く人は唯もう目を睜みはつて、夜も昼もな  
く渦巻く火炎に包まれた様な、凄じい程な華やかさを漠然と頭脳あたま  
に描いて見るに過ぎなかつたが、浅草の観音様に鳩がゐると聞い  
た時、お定は其そんな所にも鳥なぞがゐるか知らと、異様に感じた。  
そして、其所から此人はまあ、怎どうして此処まで来たのだらうと、  
源助さんの得意気な顔を打瞶うちまもつたのだ。それから源助さんは、  
東京は男にや職業が一寸見付みつかり悪いけれど、女なら幾何いくらでも口が  
ある。女中奉公しても月に賄付まかなひで四円貰へるから、お定さんも一  
二年行つて見ないかと言つたが、お定は唯俯うつむいて微笑ほほゑんだのみで  
あつた。怎して私などが東京へ行かれよう、と胸の中で呟つぶやいた  
のである。そして、今日隣家となりの松太郎と云ふ若者わかいものが、源助さ

んと一緒に東京に行きたいと言つた事を思出して、男ならばだけれども、と考へてゐた。

### 三

翌あくるひ日は、例の様に水を汲んで来てから、朝草刈に行かうとしてると、秋の雨がしとく降り出して来た。廐には未だ二日分許りまぐさ秣があつたので、隣家の松太郎の姉に誘はれたけれども、父おやぢ爺ぢが行かなくても可いと言つた。仕様事なさに、一日門口へ立つて見たり、中へ入つて見たりしてゐたが、蛇の目傘をさした源助さんの姿が、時々あちらこちら彼方此方に見えた。禿頭の忠太おぢ爺と共に、お定の

家の前を通つた事もあつた。其時、お定は何故といふ事もなく家の中へ隠れた。

一日降つた蕭かな雨が、夕方近くなつて霽つた。と穢らしい子供等が家々から出て来て、馬糞交りの泥濘を、素足で捏ね返して、学校で習つた唱歌やら流行歌やらを歌ひ乍ら、他愛もなく騒いでゐる。

お定は呆然と門口に立つて、見るともなく其を見てゐると、大工の家のお八重の小さな妹が駆けて来て、一寸来て呉れといふ姉の伝言を伝へた。

また曩日の様に、今夜何処かに酒宴でもあるのかと考へて、お定は慎しやかに水潦を避けながら、大工の家へ行つた。お八

重は欣々いそいそと迎へたが、何か四辺あたりを憚る様子で、密そつと裏口へ伴れて出た。

『何処えさ行げや？』と大工の妻は炉辺から声をかけたが、お八重は後も振向かずに、

『裏さ。』と答へた儘。戸を開けると、鶏が三羽、こツこツといひながら中に入った。

二人は、裏畑の中の材木小屋に入つて、積み重ねた角材もたに凭たれ乍ら、雨に湿つた新しい木の香を嗅いで、小一時間許りも密々ひそひそ語つてゐた。

お八重の話は、お定にとつて少しも思設けぬ事であつた。

『お定さん。お前も聞いたべす、源助さんから昨夜ゆべな、東京の話を

。』

『聞いたす。』と穏かに言つて、お八重の顔を打瞶うちまもつたが、何故か「東京」の語ことば一つだけで、胸が遽にはかに動悸がして来る様な気がした。

稍ややあつて、お八重は、源助さんと一緒に東京に行かぬかと言ひ出した。お定にとつては、無論思設けぬ相談ではあつたが、然し、盆過のがつかりした心に源助を見た娘には、必ずしも全然縁まるでのない話でもない。切りしきなしに騒ぎ出す胸に、両手を重ねながら、お定は大きい目を睜つて、言葉少なにお八重の言ふ所を聞いた。

お八重は、もう自分一人は確然ちやんと決心してる様な口吻くちぶりで、声は低いが、眼が若々しくも輝く。親に言へば無論容易に許さるべ

き事でないから、黙つて行くと云ふ事で、請<sup>うけうり</sup>売の東京の話を経々とした後、怎せ生れたからには恁<sup>こんな</sup>田舎に許り居た所で詰らぬから、一度は東京も見ようぢやないか。「若い時ア二度無い」といふ<sup>はやりうた</sup>流行唄の文句まで引いて、熱心にお定の決心を促すのであつた。

で、其方法も別に面倒な事は無い。立つ前に密<sup>こっそ</sup>り衣服<sup>きもの</sup>などを取纏めて、幸ひ此<sup>ここ</sup>村から盛岡の停車場に行つて馱夫をしてる千太郎といふ人があるから、馬車追の権作老爺<sup>おやぢ</sup>に頼んで、予じめ其千太郎の宅まで届けて置く。そして、源助さんの立つ前<sup>まへのひ</sup>日に、一晩泊で盛岡に行つて来ると言つて出て行つて、源助さんと盛岡から一緒に乗つて行く。汽車賃は三円五十銭許りなさうだが、自分は

郵便局へ十八円許りも貯金してるから、それを引出せば何も心配がない。若し都合が悪いなら、お定の汽車賃も出すと言ふ。然しお定も、二三年前から田の畔くろに植ゑる豆を自分の私得ほまちに貰つてるので、それを売つたのやら何やらで、矢張九円近くも貯めてゐた。

東京に行けば、言ふまでもなく女中奉公をする考へなので、それが奈何いかに辛くとも野良稼かぎに比べたら、朝飯前の事ぢやないかとお八重が言つた。日本一の東京を見て、食はして貰つた上に月四円。此村あたりの娘には、これ程うま好い話はない。二人は、白粉やら油やら元結やら、月々の入費を勘定して見たが、それは奈何いかに諸式の高い所にしても、月一円とは要らなかつた。毎月三円宛残して年に三十六円、三年辛抱するとすれば百円の余にもなる。



歸りに半分だけ衣服や土産を買つて来ても、五十円の正金が持つて歸られる。

『末蔵が家でや、唯四十円で家屋敷白井様に取上げられたでねえすか。』とお八重が言つた。

『雖然なす、お八重さん、源助さん真に連れてつて呉えべすか？』とお定は心配相に訊く。

『連れて行くともす。今朝誰も居ねえ時間見て見たば、連れてつても可えつて居たもの。』

『雖然、あの人だつて、お前達の親達さ、申訳なくなるべす。』

『それでなす、先方ア着いてから、一緒に行つた様でなく、後か

ら追駆けて来たで、当分東京さ置くからつて手紙寄越す筈にしたものす。』

『あの人しとだばさ。真ほんに世話して呉けえる人しとにや人しとだども。』

此時、懐手してぶらりと裏口から出て来た源助の姿が、小屋の入口から見えたので、お八重は手招ぎしてそれを呼び入れた。源助はニタリ／＼相好を崩して笑ひ乍ら、入口に立ち塞はだかつたが、

『まだ、日が暮れねえのに情夫をとこの話ぢや、天井の鼠が笑ひますぜ。』

お八重は手を挙げて其高声を制した。『あの、源助さん、今朝の話ほんア真実ほんでござんすよ。』源助は一寸真面目な顔をしたが、また直ぐに笑ひを含んで、『呟うん、好よしく、此老爺おぢいさんが引受けた

ら間違ツこはねえが、何だな、お定さんも謀叛の一味に加はつたな？』

『謀叛だど、まあ！』とお定は目を大きくした。

『だがねえお八重さん、お定さんもだ、まあ熟く考へて見る事だね。俺は奈何でも構はねえが、彼方へ行つてから後悔でもする様ぢや、貴女方自分の事だからね。汽車の中で乳飲みたくなつたと言つて、泣出されでもしちや、大變な事になるから喃。』

『誰了其そんなに……。』とお八重は肩を聳かした。

『まあさ。然う直ぐ怒らねえでも可いさ。』と源助はまたしても笑つて、『一度東京へ行きや、もう恁こんな所なにや一生歸つて来る氣になりませんぜ。』

お八重は「歸つて来なくつても可い。」と思つた。お定は、  
「歸つて来られぬ事があるものか。」と思つた。

程なく四辺あたりがもう薄暗くなつて行くのに気が付いて、二人は其

処を出た。此時まではお定は、まだ行くとも行かぬとも言はなか

つたが、兎も角も明日決しつかり然した返事をすると言つて置いて、も

一人お末といふ娘にも勧めようかと言ふお八重の言葉には、お末

の家が寡ひとすくな人だから勧めぬ方が可いと言ひ、此話は二人限きりの事

にすると堅く約束して別れた。そして、表道を歩くのが怎どうやら氣

が咎める様で、裏路伝ひに家へ歸つた。明日返事するとは言つた

ものの、お定はもう心の底では確然ちやんと行く事に決つてゐたので。

家に歸ると、母は勝手に手ランプを点つけて、夕餉の準備に急せは

しく立働いてゐた。お定は馬に乾秣やたを刻きつて塩水に搔廻やして与やつて、一担ぎ水みづを汲くんで来てから夕餉ゆふぐの膳ぜんに坐まつたが、無暗むあんに氣きがそはくくしてゐて、麦むぎ八分はちぶんの飯いひを二膳にぜんとは喰くべなかつた。

お定の家は、村でも兎うさぎに角食かくじきふに困こらぬ程ほどの農家のうかで、借財かいかいと云いつては一文いちもんもなく、多くおほくはないが田いりも畑はたけも自分おのれの所有もつ、馬うまも青あおと栗毛くりげと二頭ふたご飼かつてゐた。両親りやうしんはまだ四十前しじゅうぜんの働はたらきもの者もの、母ははは真まことの好人物おひとよしで、吾兒わがこにさへも強こい語ことば一つ掛かけぬといふ性たち、父ちちは又父またちちで、村むらには珍めづらしく酒さけも左程たしな嗜たしなまず、定次郎じやうじらうの実直まことといへば白井しらい様さまでも大事だいじの用もちには特とくに選えり上げて使つかふ位くらいで、力ちから自慢じまんに若わかいもの者ものを怒おこらせるだけだけが悪わるい癖くせだと、老人としより達たちが言いつてゐた。祖父ぢいも祖母ばばも四五年しごねん前に死しんで、お定おさだを頭あたまに男兒おとこ二人ふたり、家族かぞへといつては其

丈で、長男の定吉は、年こそまだ十七であるけれども、身体から働振から、もう立派に一人前の若者である。

お定は今年十九であつた。七八年も前までは、十九にもなつてひとりみひとりみ 独身であると、余あまされ者だと言つて人に笑はれたものであるが、

此頃では此村でも十五十六の嫁といふものは滅多になく、大抵は十八十九、隣家となりの松太郎の姉などは二十一になつて未だ何処にも縁づかずにゐる。お定は、打見には一歳ひとつも二歳ふたつも若く見える方で、

背恰好すらりの 乎としたさまは、農家の娘に珍らしい位、丸顔に黒味勝の眼が大きく、鼻は高くないが、笑窪が深い。美しい顔かほだて立たで

はないけれど、愛嬌に富んで、色が白く、漆の様な髪はえぎの生際はえぎの揃つた具合に、得も言へぬ艶なまめかしさが見える。稚い時から極おとなく穩

しい性質で、人に抗ふさからといふ事が一度もなく、口惜くやしい時には物蔭かげに隠れて泣くぐらゐるなもの、年頃になつてからは、村で一番老人達の氣に入つてゐるのが此お定で、「お定ツ子は穩おとなしくて可ええ喃なあ。」と言はれる度、今も昔も顔を染めては、「俺おら知らねえす。」と人の後に隠れる。

小学校での成績は、同じ級クラスのお八重などよりは遙ずつと劣つてゐたさうだが、唯一つ得意なのは唱歌で、其為に女教員からは一番可愛がられた。お八重は此反対に、今は他に縁づいた異はらちがひ腹はらの姉と一緒に育つた所せみ為か、負嫌あばひの、我の強い児で、娘盛りになつてからは、手もつけられぬ阿婆摺あばずれになつた。顔も亦、評判娘のお澄といふのが一昨年赤痢で亡くなつてから、村で右に出る者がな

いので、目尻に少許すこし険しい皺があるけれど、面長のキリ、とした輪廓が田舎に惜しい。此反対な二人の莫迦ばかに親密なかよしなのは、他の娘共から常に怪まれてゐた位で、また半分は嫉妬やきもち気味から、

「那あんなあばずれ阿婆摺あばずれと一緒にならねえ方が可ええす。」と、態々わざわざお定に忠告する者もあつた。

お定が其夜枕についてから、一つには今日何にも働かなかつた為か、怎どうしても眠れなくて、三時間許りも物思ひに耽つた。真黒に煤けた板戸一枚の彼方から、安々と眠つた母の寢息を聞いては、此母、此家を捨て、何として東京などへ行かれようと、すぐ涙が流れる。と、其涙の乾かぬうちに、東京へ行つたら源助さんに書いて貰つて、手紙だけは怠らず寄越す事にしようと思へる。す



ると、すぐ又三年後の事が頭に浮ぶ。立派な服装みなりをして、絹張の傘を持つて、金を五十円も貯めて来たら、両親だつて喜ばぬ筈がない。嗚呼其時になつたら、お八重さんは甚どんなに美しく見えるだらうと思ふと、其お八重の、今日目を輝かして熱心に語つた美しい顔が、怎やら嫉ましくもなる。此夜のお定の胸に、最も深く刻まれてるのは、実に其お八重そのの顔であつた。怎してお八重一人だけ東京にやられよう！

それからお定は、小学校に宿直してゐた藤田といふ若い教員の事を思出すと、何日いっになく激しく情が動いて、私が之程思つてるのと思ふと、熱あつたかい涙が又しても枕を濡らした。これはお定の片思ひなので、否、實際はまだ思ふといふ程思つてるでもなく、

藤田が四月に転任して来て以来、唯途で逢つて叩頭おしぎするのが嬉しかつた位で、遂十日許り前、朝草刈の歸りに、背負うた千草の中に、桔梗や女郎花をみなへしが交つてゐたのを、村端むらはづれで散歩してゐた藤田に二三本呉れぬかと言はれた、その時初めて言葉を交したに過ぎぬ。その翌朝からは、毎朝咲残りの秋の花を一束宛、別に手に持つて来るけれども、藤田に逢ふ機会がなかつた。あの先生さへ優しくして呉れたら、何も私は東京などへ行きもしないのに、と考へても見たが、又、今の身分ぢや兎ても先生のお細君かみさんなどに成れぬから、矢張三年行つて来るが第一だとも考へる。

四晩に一度は屹度忍んで寝に来る丑之助——兼大工かねだいくの弟子で、男振りもよく、年こそまだ二十三だが、若者わかもの中で一番幅の利

く——の事も、無論考へられた。恚<sup>かか</sup>る田舎の習慣<sup>ならはし</sup>で、若い男は、忍んで行く女の数の多いのを誇りにし、娘共も亦、口に出していふ事は無いけれ共、通つて来る男の多きを喜ぶ。さればお定は、丑之助がお八重を初め三人も四人も情婦<sup>をんな</sup>を持つてる事は熟<sup>よ</sup>く知つてゐるので、或晩の如きは、男自身の口から其情婦共の名を言はして擦<sup>くすぐ</sup>つて遣つた位。二人の間は別に思合つた訳でなく、末の約束など真面目にした事も無いが、怎かして寝つかれぬ夜などは、今頃丑さんが誰と寝てゐるか、嫉<sup>や</sup>いて見た事のないでもない。私とお八重さんが居なくなつたら、丑さんは屹度お作の所に許りゆくだらうと考へると、何かしら妬ましい様な氣もした。

胸に浮ぶ思の数々は、それからそれと果しも無い。お定は幾<sup>いくた</sup>

度か一人で泣き、幾度か一人で微笑ほほゑんだ。そして、遂ついうとくとなりかゝつた時、勝手の方に寝てゐる末の弟が、何やら声高に寝言を言つたので、はツと眼が覚め、嗚呼あの弟は淋しがるだらうかと考へて、睡氣ねむけ交りに涙ぐんだが、少女心をとめの他愛なきに、二人の弟が貰ふべき嫁を、誰彼となく心で選んでるうちに、何時しか眠つて了つた。

## 四

目を覚ますと、弟のお清書を横よこに逆さかまに貼はつた、枕の上の煤すすけた櫛れんじ子が、僅かに水の如く仄ひそめいてゐた。誰もまだ起きてゐない。

遠をちこち近で二番鶏が勇ましく時をつくる。けたたましい羽搏きの音がする。

お定はすぐ起きて、寢室ねまにしてゐる四畳半許りの板敷を出た。手探りに草裏を突かけて、表裏の入口を開けると、厩では乾秣やたを欲しがる馬の、羽目板を蹴る音がゴト／＼と鳴る。大桶を二つ担いで、お定は村端むらほづれの樋の口といふ水汲場に行つた。

例いっになく早いので、まだ誰も来てゐなかつた。漣さざなみ一つ立たぬ水槽の底には、消えかゝる星を四つ五つ鏤ちりばめた黎明しののめの空が深く沈んでゐた。清冽な秋の暁の気が、いと冷かに襟元から総身に沁む。叢にはまだ夢の様に虫の音がしてゐる。

お定は暫時しばし水を汲むでもなく、水鏡に写つた我が顔を瞶めなが

ら、ほんやり 呆然と昨夜ゆうべの事を思出してゐた。東京といふ所は、ずっとく遠い所になつて了つて、自分が怎そんなして其所まで行く氣になつたらうと怪まれる。矢張自分は此村に生れたのだから、此村で一生暮らす方が本当だ。恚かうして毎朝水汲に来るのが何より楽しい。話の様な繁華な所だつたら、屹度恚ういふ澄んだ美しい水などが見られぬだらうなど、考へた。と、後に人の足音がするので、振向くと、それはお八重であつた。矢張り桶をぶら／＼担いで来るが、寝きたれ髪なまめのしどけなさ、起きた許りで脹はれぼつたくなつてゐる臉さへ、殊更艶かしく見える。あの人が行くのだもの、といふ考へが、呆然した頭をハツと明るくした。

『お八重さん、早えなツす。』

『お前めえこそ早えなツす。』と言つて、桶を地面に下した。

『あゝ、まだ虫ア啼いてる！』と、お八重は少し顔を歪めて、後毛を搔上げる。遠く近くで戸を開ける音が聞える。

『決めたす、お八重さん。』

『決めたすか？』と言つたお八重の眼は、急に晴々しく輝いた。

『若しもお前行かなかつたら、俺一人奈どう何すべと思つてだつけす

』。

『だつてお前怎しても行くべえす？』

『お前も決めたら、一緒に行くのす。』と言つて、お八重は軽く笑つたが、『そだつけ、大變だお定さん、急がねえばならねえす

』。

『怎してす？』

『怎してつて、昨晚聞いたら、源助さん明後日立つで、早く準備せツてゐたす。』

『明後日？』と、お定は目を睜つた。

『明後日！』と、お八重も目を睜つた。

二人は暫し互みの顔を打瞶つてゐたが、『でや、明日盛岡さ  
行がねばならねえな。』と、お定が先づ我に歸つた。

『然うだす。そして今夜のうちに、衣服だの何包んで、権作老  
爺やぢ頼まねばならねえす。』

『だらハア、今夜すか？』と、お定は再目を睜つた。

左う右うしてゐるうちに、一人二人と他の水汲が集つて来たので、



二人はまだ何か密々ひそひそ語り合つてゐたが、廳やがて満々なみなみと水を汲んで担ぎ上げた。そして、すぐ二三軒先の権作が家へ行つて、

『老爺おやぢア起きたすか?』と、表から声をかけた。

『何時まで寝てるべえせア。』と、中から胴間声がする。

二人は目を見合して、ニツコリ笑つたが、桶を下して入つて行つた。馬車追ひきの老爺おやぢは丁度厩の前で乾秣やたを刻むところであつた。

『明日あした盛岡さ行くすか?』

『明日がえ? 行くどもせア。権作ア此老年としになるだが、馬車曳ふつぱらねえでヤ、腹減つて斃死くたばるだあよ。』

『だら、少許すこし持つてつて貰ひてえ物が有るがな。』

『何程なんぼでも可ええだ。明日けえア帰り荷だで、行く時えア空馬車曳ふつぱつ

て行くのだもの。』

『其そんなに沢山たんとでも無えす。俺等おらも明日盛岡さ行くども、手さ持つ

てげば邪魔だです。』

『そんだら、ハア、お前達めえだちも馬車さ乗つてつたら可がベセア。』

二人は又目を見合して、二言三言諜しめし合つてゐたが、

『でア老爺おやぢな、俺等おらも乗せでつて貰ふす。』

『然うして御座ごぜえ。唯、巢子すごの掛茶屋さ行つたら、盛切酒もりきりざけい一つ杯え

買ふだアぜ。』

『買ふともす。』と、お八重は晴やかに笑つた。

『お定ツ子も行ぐのがえ?』

お定は一寸狼狽うろたへてお八重の顔を見た。お八重は再笑またつて『一

人だば淋しだで、お定さんにも行つて貰ふべがと思つてす。』  
 『ハア、俺ア老としより人だで可えが、黒馬あをの奴ア怠てえくつ屈しねえで喜ぶ  
 でヤ。だら、明日あしたア早く来て御座え。』

此日は、二人にとつて此上もない急がしい日であつた。お定は、  
 水汲から帰ると直ぐ朝草刈に平へいだの田野へ行つたが、莫ばか迦に気がそは  
 くして、朝露に濡れた利鎌とがまが、兎角休み勝になる。離れ／＼  
 の松の樹が、山の端に登つた許りの朝日に、長い影を草の上に投  
 げて、葉毎に珠を綴つた無数の露の美しさ。秋草の香が初はつだけ蕈の  
 香を交へて、深くも胸の底に沁みる。利鎌とがまの動く毎に、サツサツ  
 と音して臥ねる草には、萎す枯れた桔梗の花もあつた。お定は胸に往ゆ

来<sup>き</sup>する取留もなき思ひに、黒味勝の眼が曇つたり晴れたり、一背負だけ刈るに、例<sup>いづも</sup>より余程長くかゝつた。

朝草を刈つて来てから、馬の手入を済ませて、朝餉を了へたが、十坪許り刈り残してある山手の畑へ、父と弟と三人で粟刈に行つた。それも午<sup>ひるまへ</sup>前には刈り了へて、弟と共に黒馬<sup>あを</sup>と栗毛の二頭で家の裏へ運んで了つた。

母は裏の物置の側<sup>わき</sup>に荒蓆を布いて、日向ぼっこをしながら、打残しの麻糸を砧<sup>う</sup>つてゐる。三時頃には父も田廻りから歸つて来て、厩の前の乾秣<sup>やたば</sup>場で、鼻唄ながらに鉋<sup>なた</sup>や鎌を研ぎ始めた。お定は唯もう気がそはくして、別に東京の事を思ふでもなく、明日の別れを悲むでもない、唯何といふ事なくそはくしてゐた。裁縫も

手につかず、坐つても居られず、立つても居られぬ。

大工の家へ裏伝ひにゆくと、恰度お八重一人ゐた所であつたが、もう風呂敷包が二つ出来上つて、押入れの隅に隠してあつた。其処へ源助が来て、明後日の夕方までに盛岡の停車場前の、松本といふ宿屋に着くから、其処へ訪ねて一緒になるといふ事に話をきめた。

それからお八重と二人家へ帰ると、父はもう鉈鎌を研ぎ上げた  
と見えて、薄暗い炉端に一人踏ふんじ込んで、葎を吹かしてゐる。

『父おやぢ爺や。』とお定は呼んだ。

『何しや？』

『明日盛岡さ行つても可えが？』

『お八重ツ子どがえ？』

『然うしや。』

『八幡様のお祭礼まつりにや、まだ十日もあるべえどら。』

『八幡様までにや、稲刈が始るべえな。』

『何しに行くだあ？』

『お八重さんが千太郎さま宅とこさ用あつて行くで、俺も伴つれてぐ言

ふでせア。』

『可えがべす、老爺おやぢな。』とお八重も喙くちを容れた。

『小遣錢があるがえ？』

『少許すこしだばあるども、呉けえらば呉けえで御座ごぜえ。』

『またお八重ツ子から、御馳走ごちようになるべな。』

と言つて、定次郎は腹掛から五十錢銀貨一枚出して、  
 上あがり框かまちに腰かけてゐるお定へ投げてよこした。

お八重はチラとお定の顔を見て、首尾よしと許り笑つたが、お定は父の露疑はぬ様を見て、おとな穩しい娘だけに胸が迫つた。さしぐんで来る涙を見せまいと、ツイと立つて裏口へ行つた。

## 五

夕方、一寸でも他よそ所ながら暇乞に、学校の藤田を訪ねようと思つたが、そのひま其暇もなく、農家の常とて夕餉は日が暮れてから済ましたが、お定は明日着て行く衣服を畳み直して置くと云つて、手ラ

ンプを持つた儘、寢室ねまにしてゐる四畳半許りの板敷に入つた。間もなくお八重が訪ねて来て、さり気ない顔をして入つたが、

『明日着て行く衣服きものすか?』と、態わざと大きい声で言つた。

『然うす。明日着て行くで、畳み直してゐるす。』と、お定も態と高く答へて、二人目を見合せて笑つた。

お八重は、もう全然準備すつかりたくが出来たといふ事で、今其風呂敷包は三つとも持出して来たが、此家ここの入口の暗い土間に隠して置いて入つたと言ふ事であつた。で、お定も急がしく萌黄もえぎの大風呂敷を拵たつたげて、手廻りの物を集め出したが、衣服といつても唯六七枚、帯も二筋、娘心には色々と不満があつて、この袷あしは少し老ふけてゐるとか、此袖口が余り開き過ぎてゐるとか、密々ひそひそ話に小一時間も



かゝつて、漸々準備が出来た。

父も母もまだ炉辺に起きてるので、も少許待つてから持出さうと、お八重は言ひ出したが、お定は些と躊躇してから、立つと明通りの煤けた櫛子れんじに手をかけると、端の方三本許り、格子が何の事もなく取れた。それを見たお八重は、お定の肩を叩いて、『この人しとアまあ、可ええ工夫してること。』と笑つた。お定も心持顔を赧くして笑つたが、風呂敷包は、難なく其処から戸外そとへ吊り下された。格子は元の通りに直された。

二人はそれから権作老爺の許へ行つて、二人前の風呂敷包を預けたが、戸外の冷かな夜風が、耳を聳する許りな虫の声を漂はせて、今夜限り此生れ故郷を逃げ出すべき二人の娘にいう許りなき

心うらがな悲しい感情を起させた。所々降つて来さうな秋の星、八日許

かたわれつき

りの片割月が浮雲の端に澄み切つて、村は家並の屋根が黒く、

なかほど

中央程の郵便局の軒燈のみ淋しく遠く光つてゐる。二人は、何と

うるみごゑ

いふ事もなく、もう湿うるみごゑ声こゑになつて、断きれぎれ々に語りながら、他よ

そ

所ながら家々に別れを告げようと、五六町しかない村を、南から

北へ、北から南へ、幾度となく手を取合つて吟行さまようた。路で逢ふ

人には、何日いつになく忸なれなれ々しく此方から優しい声を懸けた。作右

なれなれ

衛門店にも寄つて、お八重は※※ハンケチを二枚買つて、一枚はお定に呉

れた。何処ともない笑声、子供の泣く声もする。とある居酒屋の

入口からは、火光あかりが眩まばゆく洩れて、街路みちを横さまに白い線を引いて

ゐるが、虫の音も憚たふしからぬ酔うた濁だみごゑ声こゑが、時々けたゝましい其

るが、虫の音も憚たふしからぬ酔うた濁だみごゑ声こゑが、時々けたゝましい其

るが、虫の音も憚たふしからぬ酔うた濁だみごゑ声こゑが、時々けたゝましい其

るが、虫の音も憚たふしからぬ酔うた濁だみごゑ声こゑが、時々けたゝましい其

るが、虫の音も憚たふしからぬ酔うた濁だみごゑ声こゑが、時々けたゝましい其

るが、虫の音も憚たふしからぬ酔うた濁だみごゑ声こゑが、時々けたゝましい其

店の嬢の笑声を伴つて、喧嘩でもあるかの様に一町先までも聞える。二人は其騒々しい声すらも、なつかしさうに立止つて聞いてゐた。

それでも、二時間も歩いてるうちには、氣の紛れる話もあつて、お八重に別れてスタ／＼と家路に帰るお定の眼には、もう涙が滲んでゐず、胸の中では、東京に着いてから手紙を寄越すべき人を彼はと数へてゐた。此村ここから東京へ百四十五里、其そんな事は知らぬ。東京は仙台といふ所より遠いか近いか、それも知らぬ。唯明日は東京にゆくのだと許り考へてゐる。

枕に就くと、今日位身体も心も急がしかつた事がない様な氣がして、それでも、何となく物足らぬ様な、心うらがな悲しい様な、恍うつと

乎りとした疲心地で、すぐうとくと眠つて了つた。

ふと目が覚めると、消すのを忘れて眠つた枕まくらもと辺の手ランプの影に、何処から入つて来たか、蟋蟀こほろぎが二疋ひき、可憐な羽を顫はして啼いてゐる。遠くで若わかいもの者が吹く笛の音のする所から見れば、まだ左程夜が更けてもゐぬらしい。

と櫛子の外にコツコツと格子を叩く音がする。あ之で目が覚めたのだなと思つて、お定は直ぐ起き上つて、密こつそりと格子を脱はづした。丑之助が身軽に入つて了つた。

手ランプを消した。

一時間許り経つと、丑之助がもう帰準備かへりじたくをするので、これも

今夜限きりだと思ふと、お定は急に愛惜あいしきの情が喉に塞つて来て、熱い涙が滝の如く溢れた。別に丑之助に未練を残すでも何でもないが、唯もう悲しさが一時に胸を充たしたので、お定は矢庭に両手で力の限り男を抱擁だきしめた。男は暗やみの中にも、遂ぞ無い事なので吃驚びつくりして、目を円まろくしてゐたが、やがてお定は忍しのび音ねに戯すすり戯なきし始めた。

丑之助は何の事とも解りかねた。或は此お定ツ子が自分に惚れたのぢやないかとも思つたが、何しろ余り突然なので、唯目を円くするのみだ。

『怎ひごろしたけな?』と囁おとないてみたが返事がなくて一層すすり戯なきく。と、平常ひごろから此女の穏おとなしく優いぢらししかつたのが、俄かに可憐いぢらしくなつて来

て、丑之助は再また、

『怎ほんしたけな、真ほんに？』と繰返した。『俺ア何か悪い事でもしたげえ？』

お定は男の胸に密接びたりと顔を推着おつつけた儘で、強く頭を振つた。男はもう無性にお定が可憐いぢらしくなつて、

『だら怎ほんしたゞよ？ 俺ア此頃すこし少許急いそしくて四日許り来ねえでたのを、汝うなア憤おこつたのげえ？』

『嘘だ！』とお定は囁く。

『嘘でねえでヤ。俺ア真実ほんに、汝うなアせえ承知けして呉いえれば、夫いっし婦よになりてえど思つてるのに。』

『嘘だ！』とお定はまた繰返して、一層強く男の胸に顔を埋めた。

暫しは女の歔歔すすりなく声のみ聞えてゐたが、丑之助は、其漸く間斷とぎれ々々になるのを待つて、

『汝うなアほつぺた頬片、何時来ても天鷲絨ビロウドみてえだな。十四五の娘めらしご子と寝る様だ。』と言つた。これは此若者が、殆んど来る毎にお定に言つてゆく讚辞ことばなので。

『十四五の娘めらしやど子供とも寝てるだべせア。』とお定は鼻をつまらせ乍ら言つた。男は、女の機嫌ややの稍直つたのを見て、

『嘘だあでヤ。俺ア、酒でも飲んだ時ほかア他をなごの女子えさも行くども、其そんたに浮氣ばしてねえでヤ。』

お定は、胸の中で、此丑之助にだけは東京行の話をして可からうと思つて見たが、それではお八重に済まぬ。といつて、此儘

何も言はずに別れるのも残惜しい。さて怎どうしたものだらうと頻りに先刻から考へてゐるのだが、これぞといふ決断もつかぬ。

『丑さん。』と稍あつてから囁いた。

『何しや?』

『俺ア明日……』

『明日? 明日の晩も来るせえ。』

『そでねえだ。』

『だら何しや?』

『明日俺あしたおれア、盛岡さ行つて来るす。』

『何しにせや?』

『お八重さんが千太郎さん許とこさ行くで、一緒に行つて来るす。』



『然うが、八重ツ子ア今夜、何とも言はながつけえな。』

『だらお前、今夜もお八重さんさ行つて来たな?』

『然うだねえでヤ。』と言つたが、男は少許狼狽へた。

『だら何時逢つたす?』

『何時ツて、八時頃にせえ。ホラ、あのお芳ツ子許の店でせえ。』

『嘘だす、此人ア。』

『怎してせえ?』と益々狼狽へる。

『怎しても恚うしても、今夜日ヤ暮れツとがら、俺アお八重さ

んと許り歩いてだもの』

『だつて。』と言つて、男はクスクス笑ひ出した。

『ホレ見らせえ!』と女は稍声高く言つたが、別に怒つたでもな

い。

『明日あした汽車で行くだか？』

『権作おやぢ老爺の荷馬車行くで。』

『だら、朝早かべせえ。』と言つたが、『小遣錢け呉えべかな？』

ドラ、手ランプ点つけろでヤ。』

お定が黙つてゐたので、丑之助は自分で手探りに燐寸マツチを擦つて手ランプに移すと、其処に脱捨てゝある襯衣シヤツの衣囊かくしから財布を出して、一円紙幣を一枚女の枕の下に入れた。女は手ランプを消して、

『余計ねだす。』

『余計な事ねア無えせア。もつと有るものせえ。』

お定は、平常ひごろならば恁こんな 事を余り快く思はぬのだが、常々添寝した男から東京行の餞別を貰つたと思ふと、何となく嬉しい。お八重には恁 事が無からうなど、考へた。

先刻さつきの蟋蟀こほろぎが、まだ何処か室の隅ツこに居て、時々思出した様に、哀れな音を立てゝゐた。此夜お定は、怎しても男を抱擁だきしめた手を弛ゆるめず、夜明近い鶏の頻りに啼立てるまで、厩の馬の鬣たてがみを振ふ音や、ゴト／＼破目板を蹴る音を聞きながら、これといふ話もなかつたけれど、丑之助を帰してやらなかつた。

## 六

其あくるあさ翌朝は、グツスリと寝込んである所をお八重に起されて、眠い眼を擦りこすく、麦八分の冷飯に水を打懸ぶつかけて、形許かたばかり飯を済まし、起きたばかりの父母や弟に簡単な挨拶をして、村端れ近い権作の家の前へ来ると、方々から一人二人水汲の女共が、何れも眠ねむさう相な顔をして出て来た。荷馬車はもう準備したくが出来てゐて、権作は嬪かかあに何やら口小言を言ひながら、脚の太い黒馬あをを曳き出して来て馬車に繋いでゐた。

『何処へ』と問ふ水汲共には『盛岡へ』と答へた。二人は荷馬車に布いた莫蔭ござの上に、後向になつて行儀よく坐つた。傍には風呂敷包。馬車の上で髪を結つて行くといふので、お八重は別に櫛やら油やら懐中鏡やらの小さい包みを持つて来た。二人共木綿物で

はあるが、新しい八丈擬まがひの縞まがの袷あを着てゐた。

馳やがて権作は、ピシヤリと黒馬あをの尻しつを叩いて、『ハイ／＼』と言ひながら、自分も馬車に飛乗つた。馬は白い息を吐きながら、南を向けて歩き出した。

二人は、まだ頭脳あたまの中すつかりが全然覚めきらぬ様で、呆然ぼんやりとして、

段々後方に遠ざかる村の方を見てゐたが、道路の両側はまだ左程古くない松並木、暁の冷さが爽かな松風に流れて、叢の虫の音は細い。一町許り来た時、村端れの水汲場の前に、白手拭を下げた男の姿が見えた。それは、毎朝其処ハンケチに顔洗ひに来る藤田であつた。お定は膝の上に握つてゐた新しい※※ハンケチを取るより早く、少し伸び上つてそれを振つた。藤田は立止つて凝然じつと此方こつちを見てゐる様だ



村の人達は異様な印象を享けて一同多少づゝ羨望の情を起した。もう四五日も居たなら、お八重お定と同じ志願を起す者が、三人も五人も出たかも知れぬ。源助さんは満腹の得意を以て、東京見物に来たら必ず自分の家うちに寄れといふ言葉を人毎に残して、七日目の午後ごに此村を辞した。好摩かうまのステイションから四十分、盛岡に着くと、約の如く松本といふ宿屋に投じた。

とりあへず不取敢湯に入つてると、お八重お定が訪ねて来た。一緒に晚餐を了へて、明日の朝は一番汽車だからといふので、其晩二人も其宿屋に泊る事にした。

源助は、唯一本たったの銚子に一時間も費りかかながら、東京へ行つてからの事——言葉なるべくを可成早く改めねばならぬとか、二人がまだ見

た事のない電車への乗方とか、掏摸すりに気を付けねばならぬとか、  
 種いろいろ々な事を詳くどく喋つて聞かして、九時頃に寝る事になつた。八  
 畳間に寝具が三つ、二人は何れへ寝たものかと立つてゐると、源  
 助は中央の床へ潜り込んで了つた。仕方がないので、二人は右と  
 左に離れて寝たが、夜中になつてお定が一寸目を覚ました時は、  
 細めて置いた筈の、自分の枕まくらもと辺らの洋燈らんぷが消えてゐて、源助の  
 高い軒いびきが、怎やら畳三畳許り彼方むかうに聞えてゐた。

翌朝は二人共源助に呼起されて、髪を結ふも朝飯を食ふもそそく  
 卒さに、五時発の上り一番汽車に乗つた。



途中で機関車に故障があつた為、三人を載せた汽車が上野に着いた時は、其日の夜の七時過であつた。長い長いプラツトフォーム、潮うしほの様な人、お八重もお定も唯小さくなつて源助の両袂に縫つた儘、漸やうやう々の思で改札口から吐出されると、何百輛とも数知れず列んだ腕車くるま、広場の彼方は昼を欺く満街まんがいの燈火ともしび、お定はもう之だけで氣を失ふ位おツ魂消たまげて了つた。

腕車くるまが三輛、源助にお定にお八重といふ順で駆け出した。お定は生れて初めて腕車に乗つた。まだ見た事のない夢を見てゐる様な心地で、東京もなければ村もない、自分といふものも何処へ行つたやら、在るものは前の腕車に源助の後姿許り、唯ほんやり乎とし

て了つて、別に街々の賑ひを仔細に見るでもなかつた。燦爛さんらんたる火光あかり、千万の物音を合せた様な轟々たる都の響。其火光がお定を溶かして了ひさうだ。其響がお定を押潰して了ひさうだ。お定は唯もう膝の上に載せた萌黄の風呂敷包を、生命よりも大事に抱いて、胸の動悸を聴いてゐた。周囲あたりを数限りなき美しい人立派な人が通る様だ。高いく家もあつた様だ。

少し暗い所へ来て、ホツと息を吐いた時は、腕車が恰度本郷四丁目から左に曲つて、菊坂町に入つた所であつた。お定は一寸振返つてお八重を見た。

聴やがて腕車が止つて、『山田理髪店』と看板を出した明るい家の前。源助に促されて硝子戸の中に入ると、目が眩くるめく程明るくて、

壁に列んだ幾面の大鏡、洋燈ランペが幾つも幾つもあつて、白い物を着た職人が幾人も幾人もゐる。何れどが實際の人で何れが鏡の中の人なやら、見分もつかぬうちに、また源助に促されて、其店の片隅から畳を布いた所に上つた。

上つたは可いいが、何処どこに坐れば可いいのか一寸周章まごつて了つて、二人は暫し其所そのところに立つてゐた。源助は、

『東京は流石さすがに暑い。腕車くるまの上で汗が出たから喃な』と言つて、  
突いきなり然羽織はねおりを脱いで投げようとすると、三十六七の小作りおかみな内儀うちぎさんらしい人がそれを受取つた。

『怎だ、俺の留守中何も変りはなかつたかえ？』

『別に。』

源助は、長火鉢の彼方むかうへドツカと胡坐あぐらをかいて、

『さあく、お前さん達もお坐んなさい。さあ、ずっと此方こつちへ。』

『さあ何卒どうぞ。』と内儀さんも言つて、不思議相に二人を見た。二

人は人形の様ように其処そこに坐つた。お八重が叩頭おしぎをしたので、お定も遅れじと真似まねした。源助は、

『お吉や、この娘さん達はな、そら俺がよく話した南部の村の、以前非常えらい事世話になつた家の娘さん達たちでな。今度は非東京へ出て一二年奉公して見たいといふので、一緒に出て来た次第だがね。これは俺の嬬むすめですよ。』と二人を見る。

『まあ然うですか。些ちよつとお手紙にも其そん事ことがあつたつて、新太郎が言つてましたがね。お前さん達、まあ遠い所をよくお出になつ

たことねえ。真ほんに。』

『何卒どうかハア……』と、二人は血を吐く思で漸く言つて、穩おとなしく頭を下げた。

『それにな、今度七日遊んでるうち、此方こつちの此お八重さんといふ人の家に厄介になつて来たんだよ。』

『おや然さう。まあ甚どんなにか宅うちぢや御世話様になりましたか。真ほんに遠い所をよく入来いらしつた。まあくお二人共自分の家へ来た積りで、緩ゆつくり見物でもなさいましよ。』

お定は此時、些ちつとも気が付かずに何もお土産を持つて来なかつたことを思つて、一人胸を痛めた。

お吉は小作りなキリリとした顔立の女で、二人の田舎娘には見

た事もない程立居振舞が敏捷すばしこい。黒縹くろじゆす子の半襟をかけた唐たうぎ棧せんの袷を着てゐた。

二人は、それから名前や年齢やお吉に訊かれたが、大抵源助が引取つて返事をして呉れた。負けぬ氣のお八重さへも、何か喉つまに塞つた様で、一言も口へ出ぬ。況ましてお定は、以後先これからさき、怎して那あんな滑かな言葉を習つたもんだらうと、心細くなつて、お吉の顔が自分等の方に向くと、また何か問はれる事と氣が氣でない。

『阿父様おとつあん、お帰んなさい。』と言つて、源助の一人息子の新太郎も入つて来た。二人にも挨拶して、六年許り前に一度お定らの村に行つた事があるところから、色々と話を出す。二人は再また之の応答に困らせられた。新太郎は六年前の面影が殆ど無く、今はも

う二十四五の立派な男、父に似ず背が高く、キリリと角帯を結んだ恰好の好き、髪は綺麗に分けてゐて、鼻が高く、色だけは昔ながらに白い。

一体、源助は以前もと静岡在の生れであるが、新太郎が二歳ふたつの年にぶらり飄然と家出して、東京から仙台盛岡、其盛岡に居た時、恰あたかも白井家の親類な酒造家の隣家の理髪店とこやにゐたものだから、世話する人あつてお定らの村に行つてゐたので、父親に死なれて郷里くにに帰ると間もなく、目の見えぬ母とお吉と新太郎を連れて、些いささか少の家屋敷を売払ひ、東京に出たのであつた。其母親は去年の暮に死んで了つたので。

お茶も出された。二人が見た事もないお菓子も出された。

源助とお吉との会話が、今度死んだ函館の伯父の事、其葬式の事、後に残つた家族共の事に移ると、石の様に堅くなつてるので、お定が足に麻痺しびれがきれて来て、膝頭うづが疼く。泣きたくなるのを漸く辛抱して、凝じつと畳の目を見てゐる辛さ。九時半頃になつて、漸やうやう々々「疲れてゐるだらうから。」と、裏二階の六畳へ連れて行かれた。立つ時は足に感覚がなくなつてゐて、危く前に仆のめらうとしたのを、これもフラフラしたお八重に抱きついて、互ひに辛さうな笑ひを洩らした。

風呂敷包を持つて裏二階に上ると、お吉は二人前の蒲団ちよつを運んで来て、手早く延べて呉れた。そして狭い床の間に些と腰掛けて、三言四言お愛想を言つて降りて行つた。



二人限きりになると、何れも吻ほっと息を吐いて、今し方お吉の腰掛けた床の間に膝をすれこそこそに腰掛けた。かくて十分許りの間、田舎言葉で密々話こそこそし合つた。お土産を持つて来なかつた失策てぬかりは、お八重も矢張気がついてゐた。二人の話は、源助さんも親切だが、お吉も亦、氣の隔おけぬ親切な人だといふ事に一致した。郷里の事は二人共何にも言はなかつた。

をか訝しい事には、此時お定の方が多く語つた事で、阿婆摺あばずれと謂はれた程のお八重は、始終受身に許りなつてくちすくな口寡くちすくなにのみ応答してゐた。枕についたが、二人とも仲々眠られぬ。さればといつて、別に話すでもなく、細めた洋燈の光に、互に顔を見ては穩おとなしく微ほ笑ほろみを交換してゐた。

## 八

翌朝あくるあさ

は、枕辺の障子が白み初めた許りの時に、お定が先づ

目を覚ました。嗚呼東京に來たのだつけ、と思ふと、昨晚の足の

麻痺しびれが思出される。で、膝頭を伸ばしたり曲かめたりして見たが、

もう何ともない。階下したではまだ起きた気色けはひがない。世の中が森と

沈まり返つてゐて、腕車くるまの上から見た雑踏が、何処かへ消えて了

つた様な氣もする。不凶、もう水汲に行かねばならぬと考へたが、

否いや、此処は東京だつたと思つて幽かに笑つた。それから二三分の

間は、東京ぢや怎して水を汲むだらうと云ふ様な事を考へてゐた

が、お八重が寝返りをして此方へ顔を向けた。何夢を見てゐるのか、眉と眉の間に皺を寄せて苦し相に息をする。お定はそれを見ると直ぐ起き出して、声低くお八重を呼び起した。

お八重は、深く息を吸つて、パツチリと目を開けて、お定の顔を怪訝相けげんさうに見てゐたが、

『ア、家えに居えだのでヤなかつたけな。』と言つて、ムクリと身を起した。それでもまだ得心がいかぬといった様に周囲あたりを見廻してゐたが、

『お定さん、俺おらア今夢見て居えだつけおんす。』と甘える様な口調。

『家えの方えのすか？』

『家えの方えのす。ああ、可怖おっかながつた。』とお定の膝ひざに投げる様に

身を恁せて、片手を肩にかけた。

其夢といふのは恁かうで。——村で誰か死んだ。誰が死んだのか

解らぬが、何でも老としより人だつた様だ。そして其葬式が村役場から

出た。男も女も、村中の人皆野送の列に加つたが、巡査が劍の

束つかに手をかけながら、『物を言ふな、物を言ふな』と言つてゐた。

北の村むらほづれ端から東に折れると、一町半の寺道、其半ば位まで行

つた時には、野送の人が男許り、然も皆洋服を着たり紋付を着た

りして、立派な帽子を冠つた髯の生えた人達許りで、其中に自分

だけが腕車の上に縛られてゆくのであつたが、甚どんな人が其腕車を

曳いたのか解らぬ。杉の木の下を通つて、寺の庭で三遍廻つて、

本堂に入ると、棺桶の中から何ともいへぬ綺麗な服装をした、美

しいお姫様の様な人が出て中央に坐つた。自分も男達と共に坐ると、『お前は女だから。』と言つて、ずっと前の方へ出された。見た事もない小僧達が奥の方から沢山出て来て、かね鑢や太鼓を鳴らし初めた。それは喇叭節の節であつた。と、いつも例の和尚様がほつす払子を持つて出て来て、綺麗なお姫様の前へ行つておじぎ叩頭をしたと思ふと、自分の方へ歩いて来た。高い足駄を穿いてゐる。そして自分の前に突立つて、『お八重、お前はあのお姫様の代りにお墓に入るのだぞ。』と言つた。すると何時の間にか源助さんが側かたはらに来てゐて、自分の耳に口をあてて『厭だと言へ、厭だと言へ。』と教へて呉れた。で、『厭だす。』と言つて横を向くと、（此時寝返りしたのだらう。）和尚様が廻つて来て、髭の無い顎に手をやつて、丁

度髯を撫で下げる様な具合にすると、赤い／＼血の様な髭が、延びたく、臍へそのあたりまで延びた。そして、眼を皿の様に大きくして、『これでもか?』と、怒鳴つた。其時目が覺めた。

お八重がこれを語り了つてから、二人は何だか氣味が悪くなつて来て、暫時しばらく意味あり氣に目と目を見合せてゐたが、何方どちらでも胸に思ふ事は口に出さなかつた。左さう右かうしてゐるうちに、階下したでは源助が大きな嘔あくびをする声がして、廳やがてお吉が何か言ふ。五分許り過ぎて誰やら起きた様な氣色けはひがしたので、二人も立つて帯を締めた。で、蒲団を畳まうとしたが、お八重は、『お定さん、昨晚ゆべな持つて来た時、此蒲団どア表出して畳まさつてらけすか、裏出して畳まさつてらけすか?』と言ひ出した。

『さあ、何方どっちだたべす。』

『何方だたべな。』

『困こつたなア。』

『困こつたなす。』と、二人は暫時しばし、呆然ぼんやり立つて目を見合せてゐたが、

『表な様だつけな。』とお八重。

『表だつたべすか。』

『そだつけぜ。』

『そだたべすか。』

怙かくて二人は蒲団を畳んで、室の隅に積み重ねたが、怙こんなに早く階下したに行つて可いものか怎どうか解らぬ。怎しようと相談した結果、

兎も角も少許待つてみる事にして、室の中央に立つた儘周囲を見廻した。

『お定さん、細え柱だなす。』と大工の娘。奈何様、太い材木を不体裁に組立てた南部の田舎の家に育つた者の目には、東京の家は地震でも揺れたら危い位、柱でも鴨居でも細く見える。

『真ほんにせえ。』とお定も言つた。

で、昨晚見た階下の様子を思出して見ても、此室の畳の古い事、壁紙の所々裂けた事、天井が手の届く程低い事などを考へ合せて見ても、源助の家は、二人及び村の大抵の人の想像した如く、左程立派でなかつた。二人はまた其事を語つてゐたが、お八重が不図、五尺の床の間にかけてある、縁日物の七福神の掛物を指して、



『あれア何だか知おんだすか？』

『恵比須大黒だべす。』

二人は床の間に腰掛けたが、

『お定さん、これア何だす？』と囃中の人を指さす。

『槌持つてるもの、大黒様だべアすか。』

『此こつち方ア？』

『恵比須だす。』

『すたら、これア何だす？』

『布袋様す、腹ア出てるもの。あれ、忠太老おやぢ爺に似たぜ。』と言

ふや、二人は其忠太の恐ろしく肥つた腹を思出して、口に袂をあ

てた儘、暫しは子供の如く笑ひ続けてゐた。

階下<sup>した</sup>では裏口の戸を開ける音や、鍋の音がしたので、お八重が先に立つて階段を降りた。お吉はそれと見て、

『まあ早いことお前さん達は。まだく寝<sup>やす</sup>んでらつしやれば可いの。』と、笑顔を作つた。二人は勝手への隔<sup>へだて</sup>の敷居に両手を突いて、『お早エなつす。』を口の中だけに言つて挨拶をすると、

お吉は可笑しさに些<sup>ちよつ</sup>と横向いて笑つたが、

『怎もお早う。』と晴やかに言ふ。

よく眠れたかとか、郷里<sup>くに</sup>の夢を見なかつたかとか、お吉は昨晩<sup>ゆうべ</sup>よりもズツト忸<sup>なれなれ</sup>々<sup>いろいろ</sup>しく種々な事を言つてくれたが、

『お前さん達のお郷里<sup>くに</sup>ぢや水道はまだ無いでせう?』

二人は目を見合せた。水道とは何の事やら、其話は源助からも

聞いた記憶がない。何と返事をして可いか困つてると、

『何でも一通り東京の事知つてなくちや、御奉公に上つても困るから、私と一緒にいらつ入来しやい。教へて上げますから』と、お吉は手桶を持つて下り立つた。『ハ。』と答へて、二人も急いで店から自分達の下駄を持つて来て、裏に出ると、お吉はもう五六間先む方かうへ行つて立つてゐる。

何の事はない、郵便函の小さい様なものが立つてゐて、四辺あたりの土が水に濡れてゐる。

『これが水道ツて言ふんですよ。可よござんすか。それで慥かうすると水が幾いく何くらでも出て来ます。』と、お吉は笑ひながら栓ねぢを捻ねぢつた。途端に、水がゴウと出る。

『やあ。』とお八重は思はず驚きに声を出したので、すぐに羞はづかしくなつて、顔を火の様にした。お定も口にこそ出さなかつたが、同じ『やあ。』が喉元まで出かけたつたので、これも顔を紅くしたが、お吉は其中に一杯になつた桶と空なのと取代へて、

『さあ、何方どなたなり一つ此栓を捻つて御覧なさい。』と、宛然さながら小学校の先生が一年生に教へる様な調子。二人は目と目で互に譲り合つてゐて、仲々手を出さぬので、

『些ちつとも怖い事はないんですよ。』とお吉は笑ふ。で、お八重が思切つて、妙な手つきで栓を力委せに捻ると、特別な仕掛がある訳でないから水が直ぐ出た。お八重は何となく得意になつて、軽く声を出して笑ひながら、お定の顔を見た。

帰りはお吉の辞するも諾きかず、二人で桶を一つ宛軽々と持つて、勝手口まで運んだが、背後うしろからお吉が、

『まあお前さん達は力が強い事！』と笑つた。此語の後に潜んだ意味などを、察する程に伶俐かしこいお定ではないので、何だか賞められた様な気がして、密そつと口元に笑を含んだ。

それから、顔を洗へといはれて、急いで二階から浅黄の手拭やら櫛やらを持つて来たが、鏡は店に大きいのがあるからといはれて、怖るく種々の光る立派な道具を飾り立てた店に行つて、二人は髪を結び出した。間もなく、表二階に泊つてる職人が起きて来て、二人を見ると、『お早う。』と声をかけて妙な笑を浮べたが、二人は唯もうきまりが悪くて、顔を赤くして頭を垂れてゐる

儘、鏡に写る己が姿を見るさへも羞しく、堅くなつてそそくさ 卒に髪を結つてゐたが、それでもお八重の方はチヨイ／＼横よこめ盼を使つて、職人の為る事を見てゐた様であつた。

すべてが恁こんな 具合で、朝あさめし餐も済んだ。其朝餐の時は、同じ食ちやぶやぶだだい

卓たくに源助夫婦と新さんとお八重お定の五人が向ひ合つたので、二人共三膳とは食へなかつた。此日は、源助が半月に余る旅から歸つたので、それ／＼手土産しるべを持つて知辺しるべの家を廻らなければならぬから、お吉は家うちが明けられぬと言つて、見物は明日に決つた。

二人は、不器用な手つきで、食後の始末にも手伝ひ、二人限で水汲にも行つたが、其時お八重はもう、一度経験があるので上級

生の様な態度をして、

『流石は東京だでやなつす！』と言つた。

かくて此日一日は、殆んど裏二階の一室で暮らしたが、お吉は時々やつて来て、何呉となく女中奉公の心得を話してくれるのであつた。お定は、なまなか生中礼儀などを守らず、つけ／＼言つてくれる此女を、もう世の中に唯一人の頼りにして、嘗てかつ自分等の村の役場に、盛岡から来てゐた事のある助役様の内儀おかみさんよりも親切な人だと考へてゐた。

お吉が二人に物言ふさまは、若し傍はたで見えてゐる人があつたなら、どんな甚に可笑しかつたか知れぬ。言葉を早く直さねばならぬと言つては、先づ短いのから稽古せよと、『かしこまりました。』とか、

『行つてらツしやい。』とか、『お帰んなさい。』とか、『左様さいでございますか。』とか、繰返し／＼教へるのであつたが、二人は胸の中でそれを擬まねて見るけれど、仲々お吉の様にはいかぬ。郷里くに言葉の『然そだすか。』と『左様さいでございますか。』とは、第一長さが違ふ。二人には『で』に許り力が入つて、兎角『さいで、ございますか。』と二つに切れる。

『さあ、一つ口に出して行つて御覧なさいな。』とお吉に言はれると、二人共すぐ顔を染めては、『さあ』『さあ』と互ひに譲り合ふ。

それからお吉はまた、二人が余り穩おとなしくして許りゐるので、店に行つて見るなり、少許すこ街上おもてを歩いてみるなりしたら怎だと言



つて、

『家の前から昨晚腕車で来た方へ少許行くと、本郷の通りへ出ますから、それはく賑かなもんですよ。其処の角には勧工場くわんこうばと云つて何品なんでも売る所があるし、右へ行くと三丁目の電車、左へ行くと赤門の前——赤門といへば大学の事ことてすよ、それ、日本一の学校、名前位は聞いた事があるんでせうさ。何なに、大丈夫氣をつけてさへ歩けば、何処まで行つたつて迷兎になんかなりやしませんよ。角の勧工場と家の看板さへ知つてりや。』と言つたが、『それ、家の看板には恁う書いてあつたでせう。』と人差指で置に「山田」と覺束なく書いて見せた。『やまだと読むんですよ。』

二人は稍得意な笑顔をして頷うなづき合つた。何故なれば、二人共尋

常科だけは卒<sup>を</sup>へたのだから、山の字も田の字も知つてゐたからなので。

それでも仲々階<sup>した</sup>下にさへ降り渋つて、二人限になれば何やら密<sup>こ</sup>そこそ

々話合つては、袂を口にあてて声立てずに笑つてゐたが、夕方

近くなつてから、お八重の発起で街路<sup>そと</sup>へ出て見た。成程大きなペ

ンキ塗の看板には「山田理髪店」と書いてあつて、花の様なお菓子

子を飾つたお菓子屋と向ひあつてゐる。二人は右視<sup>とみかうみ</sup>左視して、此

家忘れてはなるものかと見廻してると、理髪<sup>とこや</sup>店の店からは四人の

職人が皆二人の方を見て笑つてゐた。二人は交<sup>かはるがはる</sup>代<sup>かはるがはる</sup>に振返つて

は、もう何間歩いたか胸で計<sup>かんじやう</sup>算しながら、二町許りで本郷館

の前まで来た。

盛岡の肴町位だとお定の思つた菊坂町は、此処へ来て見ると宛ま然る田舎の様だ。あゝ東京の街！ 右から左から、刻一刻に満干さしひきする人の潮うしほ！ 三方から電車と人とが崩なだれて来る三丁目の喧囂けんかうは、宛さながら今にも戦が始りさうだ。お定はもう一步も前に進みかねた。

勸工場は、小さいながらも盛岡にもある。お八重は本郷館に入つて見ないかと言出したが、お定は『此次にすべす。』と言つて洩くつた。で、お八重は決しかねて立つてゐると、車夫くるまやが寄つて来て、頻しきりに促うす。二人は怖ろしくなつて、もと来た路を駆け出した。此時も背後うしろに笑声が聞えた。

第一日は慙かくて暮れた。

## 九

第二日目は、お吉に伴れられて、朝八時頃から見物に出た。

先づ赤門、『恁ごんたな 学校にも教師せんせア居えべすか？』とお定は囁やいたが、『居えるのす。』と答へたお八重はツンと済してゐた。不忍の池では海の様だと思つた。お定の村には山と川と田と畑としか無かつたので。さて上野の森、話に聞いた銅像よりも、木立の中の大仏の方が立派に見えた。電車といふものに初めて乗せられて、浅草は人の塵溜ちりため、玉乗に汗を握り、水族館の地下室では、源助の話を思出して帯の間の財布かみいれを上から抑へた。人の数が搦摸すりに

見える。凌雲閣には余り高いのに怖気おぢけ立つて、遂々たうたう上らず。吾妻橋に出ては、東京では川まで大きいと思つた。両国の川開きの話をお吉に聞かされたが、甚どんな事をするものやら遂に解らず了ひ。上潮に末広の長い尾を曳く川蒸気は、仲々異なるものであつた。銀座の通り、新橋のステーション、勸工場くわんこうばにも幾度いくたびか入つた。二重橋は天子様の御門と聞いて叩頭おしぎをした。日比谷の公園では、立派な若い男と女が手を取り合つて歩いてるのに驚いた。

須田町の乗換に方角を忘れて、今来た方へ引返すのだと許り思つてるうちに、本郷三丁目に来て降りるのだといふ。お定はもう日が暮れかかつてるのに、まだ引張り廻されるのかと、気が気でなくなつたが、一町と歩かずに本郷館の横へ曲つた時には、東京

の道路は訝をかしいものだと思へた。

理髪店に帰ると、源助は黒い額に青筋立てて、長火鉢の彼方に怒鳴つてゐた。其前には十七許りの職人が平蜘蛛の如く匍へたばつてゐる。此間から見えなかつた斬髪機バリカンが一挺、此職人が何処かに隠し込んで置いたのを見付かつたとかで。お定は二階の風呂敷包が氣になつた。

二人はもう、身体も心も綿の如く疲れきつてゐて、昼頃何処やらで蕎麦を一杯宛食つただけなのに、燈火あかりがついて飯になると、唯一膳の飯を辛やつと喉を通した。頭脳あたまは乎ぼうつとしてゐて、これといふ考へも浮ばぬ。話も興がない。耳の底には、まだ轟々たる都の轟きが鳴つてゐる。

幸ひ好い奉公の口があつたが、先づ四五日は緩り遊んだが可からうといふ源助の話を聞いて、二人は夕餐ゆふめしが済むと間もなく二階に上つた。二人共「疲れた。」と許り、べたりと横に坐つて、話もない。何処かしら非常に遠い所へ行つて来た様な心地である。浅草とか日比谷とかいふ語ことばだけは、すぐ近間にある様だけれど、それを口に出すには遠くまで行つて来なげやならぬ様に思へる。一時間前まで見て来た色々の場所、あれもくくと心では数へられるけれど、さて其景色は仲々眼に浮ばぬ。目を瞑ると轟々たる響。玉乗や、勧工場の大きな花瓶が、チラリ、チラリと心を掠める。足下から鳩が飛んだりする。

お吉が、『電車ほど便利なものはない。』と言つた。然しお定

には、電程怖ろしいものはなかつた。線路を横切つた時の心地は、思出しても冷汗が流れる。後先を見廻して、一町も向うから電車が来ようものなら、もう足が動かぬ。漸つやうやとそれを遣り過して、十間も行つてから思切つて向側に駆ける。先づ安心と思ふと胸には動悸が高い。況まして乗つた時の窮屈さ。洋服着た男とでも肩が擦れくになると、訳もなく身体が縮んで了つて、些ちよと首を動かすにも頸筋が痛い思ひ。停るかと思へば動き出す。動き出したかと思へば停る。しつきりなしの人の乗降、よくも間違が起らぬものと不思議に堪へなかつた。電車に一町乗るよりは、山路を三里素足で歩いた方が杳はるか優ましだ。

大都是其凄まじい轟々たる響きを以て、お定の心を圧した。然



しお定は別に郷里に帰りたいたいと思はなかつた。それかと言つて、東京が好なでもない。此処に居ようとも思はねば、居まいとも思はぬ。一刻の前をも忘れ、一刻の後をも忘れて、おと穩なしいお定は疲れてゐるのだ。たゞ疲れてゐるのだ。

煎餅を盛つた小さい盆を持つて、上つて来たお吉は、明日お湯屋に伴れて行くと言つて、下りて行つた。

九時前に二人は蒲団を延べた。

三日目は雨。

四日目は降りみ降らずみ。九月ももう二十日を過ぎたので、残

暑の汗を洗ふ雨の糸を、初秋めいたうそ寒さが白く見せて、蕭しとし  
とひさし々と廂を濡らす音が、山中の村で聞くとは違つて、厭に陰気な  
 心を起させる。二人は徒つくねん然として相對した儘、言葉少なに郷里  
 の事を思出してゐた。

ひるめし 午餐が済んで、二人がまだお吉と共に勝手にゐたうちに、二  
 人の奉公口を世話してくれたといふ、源助と職業しごと仲間の男が来て、  
 先様では一日も早くといふから、今日中に遣る事にしたら怎どうだと  
 言つた。

源助は、二人がまだ何にも東京の事を知らぬからと言ふ様な事  
 を言つてゐたが、お吉は、行つて見なげや何日までだつて慣れぬ  
 といふ其男の言葉に賛成した。

遂に行く事に決つた。

で、お吉は先づお八重、次にお定と、髪を銀杏返しに結つてくれたが、お定は、余り前髪を大きく取つたと思つた。帯も締めて貰つた。

三時頃になつて、お八重が先づ一人源助に伴なはれて出て行つた。お定は急に淋しくなつて七福神の床の間に腰かけて、小さい胸をひしと抱いた。眼には大きい涙が。

一時間許りで源助は歸つて来たが、先様の奥様はきやく淡白な人で、お八重を見るや否や、これぢや水道の水を半年もつかふと、大した美人になると言つた事などを語つた。

早目にゆふめし晚餐を済まして、今度はお定の番。すぐ近い坂の上だ

といふ事で、風呂敷包を提げた儘、黄昏時たそがれどきの雨の霽間はれまを源助の後に跟ついて行つたが、何と挨拶したら可いものかと胸を痛めながらすこすこ悄然と歩いてゐた。源助は、先方むかうでも真ほんの田舎者な事を御承知なのだから、万事間違のない様に奥様の言ふ事を聞けと繰返し教へて呉れた。

真砂町のトある小路、右側に「小野」と記した軒燈の、点火ともり初めた許りの所へ行つて、

『此の家だ。』と源助は入口の格子をあけた。お定は遂ぞ覚えぬ不安に打たれた。

源助は三十分許り経つて歸つて行つた。

竹筒台の洋燈が明るい。茶棚やら箆筒やら、時計やら、箆筒の上の立派な鏡台やら、八畳の一室にありとある物は皆、お定に珍らしく立派なもので。黒柿の長火鉢の彼方に、二寸も厚い座蒲団に坐つた奥様の年は二十五六、口が少しへの字になつて鼻先が下に曲つてるけれども、お定には唯立派な奥様に見えた。お定は洋燈の光に小さくなつて、石の如く坐つてゐた。

銀行に出る人と許り聞いて来たのであるが、お定は銀行の何ものなるも知らぬ。其旦那様はまだお帰りにならぬといふ事で、五歳許りの、眼のキヨロくした男の児が、奥様の傍に横になつて、何やら絵のかいてある雑誌を見つゝ、時々不思議相にお定を見てゐた。

奥様は、源助を送り出すと、其儘手づから洋燈を持つて、家中の部屋々々をお定に案内して呉れたのであつた。玄関の障子を開けると三畳、横に六畳間、奥が此八畳間、其奥にも一つ六畳間があつて主人夫婦の寢室ねまになつてゐる。台所の横は、お定の室と名指された四畳の細長い室で、二階の八畳は主人の書齋。

さて、奥様は、真白な左の腕を見せて、長火鉢の縁に臂を突き乍ら、お定のために明日からの日課となるべき事を細こまごま々と説くのであつた。何処の戸を一番先に開けて、何処の室の掃除は朝飯過で可いか。来客のある時の取次の仕方から、下駄靴の揃へ様、御用聞に来る小僧等への応対の仕方まで、艶のない声に諄じゆんじゆん々々と喋り続けるのであるが、お定には僅かに要領だけ聞きとれたに

過ぎぬ。

其処へ旦那様がお帰りになると、奥様は座を譲つて、反対の側の、先刻<sup>さつぎ</sup>まで源助の坐つた座蒲団に移つたが、

『貴郎<sup>あなた</sup>、今日は大層遅かつたぢやございませんか？』

『ああ、今日は重役の鈴木<sup>とこ</sup>ン許に廻つたもんだからな。（と言つ

てお定の顔を見てゐたが）これか、今度の女中は？』

『ええ、先刻<sup>せんこく</sup>菊坂の理髪店<sup>とこや</sup>だつてのが伴れて来ましたの。（お定を向いて）此方<sup>このかた</sup>が旦那様だから御挨拶しな。』

『ハ。』と口の中で答へたお定は、先刻<sup>さつぎ</sup>からもう其挨拶に困つて了つて、肩をすぼめて切ない思ひをしてゐたので、恚ういはれると忽ち火の様に赤くなつた。

『何卒ハ、お頼たのま申まをします。』と、聞えぬ程に言つて、両手を突く。旦那様は、三十の上を二つ三つ越した、髯の厳しい立派な人であつた。

『名前は何？』

といふを冒頭はじめに、年齢としも訊かれた、郷里くにも訊かれた、両親のあるか無いかも訊かれた。学校へ上つたか怎かも訊かれた。お定は言葉に窮こまつて了つて、一言ひとこと言はれる毎に穴あらば入りたくなる。足が耐へられぬ程麻痺しびれて来た。

稍あつてから、『今夜は何もしなくても可いから、先刻教へたアノ洋燈ランプをつけて、四畳に行つてお寝やすみ、蒲団は其処の押入に入つてある筈だし、それから、まだ慣れぬうちは夜中に目をさまし



て便所はばかりにでもゆく時、戸惑ひしては不可いけぬから、洋燈は細めて危なくない所に置いたら可いだらう。』と言ふ許おゆるし可が出て、奥様から燐寸を渡された時、お定は甚どんなに嬉しかつたか知れぬ。

言はれた通りに四畳へ行くと、お定は先づ両脚を延ばして、膝頭を軽く拳こぶしで叩いて見た。一方に障子二枚の明りとり、昼はさぞ薄暗い事であらう。窓と反対の、奥の方の押入を開けると、蒲団もあれば枕もある。妙な臭気が鼻を打つた。

お定は其処に膝をついて、開けた襖からかみに片手をかけた儘一時間許りも身動きをしなかつた。先づ明日の朝自分の為ねばならぬ事を胸に数へたが、お八重さんが今頃怎してる事かと、友の身が思はれる。郷里くにを出て以来、片時も離れなかつた友と別れて、源助に

もお吉にも離れて、ああ、自分は今初めて一人になつたと思ふと、  
穏しい娘心はもう涙ぐまれる。東京の女中！郷里くにで考へた時は  
何ともいへぬ華やかな楽しいものであつたに、……然さういへば自  
分はまだ手紙も一本郷里へ出さぬ。と思ふと、両親の顔や弟共の  
声、馬の事、友達の事、草刈の事、水汲の事、生れ故郷つまびが詳らか  
に思出されて、お定は凝じつと涙の目を押おし暝つぶつた儘、『阿母あつばあ、許  
してける。』と胸の中で繰返した。

左さう右かうしてゐるうちにも、神経が鋭くなつてゐて、壁の彼方か  
ら聞える主人夫婦の声に、若しや自分の事を言やせぬかと氣をつ  
けてゐたが、時計が十時を打つと、皆寝て了つた様だ。お定は、  
若しも明朝寢坊をしてはと、漸やうやう々涙を拭つて蒲団を取出した。

三分心の置洋燈を細めて、枕に就くと、気が少し暢然ゆつたりした。お八重さんももう寝たらうかと、又しても友の上を思出して、手を伸べて掛蒲団を引張ると、何となくフワリとして綿が柔かい。郷里で着て寝たのは、板の様に薄く堅い、荒い木綿の飛白かすりの皮をかけたのであつたが、これは又源助の家で着たのよりも柔かい。そして、前にゐた幾人の女中の汗やら髪あぶらの膩あぶらやらが浸みてるけれども、お定には初めての、黒い天鷲絨ビロウドの襟えりがかけてあつた。お定は不図ふと、丑之助がよく自分の頬ほつぺた片ぺたを天鷲絨の様だと言つた事を思出した。

また降り出したと見えて、蕭しめやかな雨の音が枕に伝はつて来た。お定は暫時しばし恍うつとり乎として、自分の頬ほを天鷲絨の襟えりに擦つて見てゐ

たが、幽かな微笑をほほゑみ口元に漂はせた儘で、何時しか安らかな眠に入つて了つた。

## 十

目が覚めると、障子が既に白んで、枕まくらもと辺の洋燈は昨晚よべの儘に点いてはゐるけれど、光が鈍く※々《じじ》と幽かな音を立ててゐる。寝過しはしないかと狼狽うろたへて、すぐ寢床から飛起きたが、誰も起きた様子がない。で、昨日まで着てゐた衣服きものは手早く畳んで、萌黄の風呂敷包から、荒い縞の普通着ふだんぎ（郷里くにでは無論普通に着なかつたが）を出して着換へた。帯も紫がかつた縷子しゆすのものは畳

んで、幅狭い唐縮緬の丸帯を締めた。

奥様が起きて来る気配がしたので、大急ぎに蒲団を挿入に入れ、  
劃しきりの障子をあげると、

『早いね。』と奥様が声をかけた。お定は台所の板の間に膝をついてお叩頭しぎをした。

それからお定は吩いひつけ附つけに随つて、焜炉こんろに炭を入れて、石油を注いで火をおこしたり、縁側の雨戸を繰つたりしたが、

『まだ水を汲んでないぢやないか？』

と言はれて、台所中見廻したけれども、手桶らしいものが無い。すると奥様は、

『それ其処にバケツが有るよ。それ、それ、何処を見てるだらう、

此人は。』と言つて、三和土たきになつた流場の隅を指した。お定は、指された物を自分で指して、叱しられたと思つたから顔を赤くしながら、

『これでごあんすか?』と奥様の顔を見た。バケツといふ物は見  
た事がないので。

『然うとも。それがバケツでなくて何ですかよ。』と稍やや御機嫌が  
悪い。

お定は、恁こんな物に水を汲むのだもの、俺には解る筈がないと考  
へた。

此家では、「水道」が流場の隅にあつた。

長火鉢の鉄瓶の水を代へたり、方々雑巾を掛けさせられたりし

てから、お定は小路を出て一町程行つた所の八百屋に使ひに遣られた。奥様は葱とキヤベージを一個ひとつ買つて来いといふのであつたが、キヤベージとは何の事か解らぬ。で、恐るゝ聞いて見ると、『それ恠　ので（と両手で円を作つて）白い葉が堅く重なつてるのさ。お前の郷里にや無いのかえ。』と言はれた。でお定は、『ハア、玉菜でごあんすか。』と言ふと、『名は怎でも可いから早く買つて来なよ。』と急せぎ立てられる。お定はまた顔を染めて戸外へ出た。

八百屋の店には、朝市へ買出しに行つた車がまだ歸つて来ないので、昨日の売残りが四種よいろ五種いっいろ列べてあるに過ぎなかつたが、然しお定は、其前に立つと、妙な心地になつた。何とやらいふ菜

に茄子が十許り、脹はちき切れさうによく出来た玉キヤベーチ菜なが五個六個、それだけではあるけれ共、野良育ちのお定には此上なく慕なつかしい野菜の香が、仄かに胸を爽かにする。お定は、露を帯びた裏畑を頭に描き出した。ああ、あの紫色な茄子の畝！ 這はびこひ蔓つた葉に地面つちを隠した瓜畑！ 水の様な暁の光に風も立たず、一夜さを鳴き細つた虫の声！

萎びた黒繻子の帯を、ダラシなく尻に垂れた内儀に、『入いらつ来しやい。』と声をかけられたお定は、もうキヤベーチといふ語を忘れてゐたので、唯『それを』と指さした。葱は生あいにく憎一把もなかつた。

風呂敷に包んだ玉菜ひとつ一個を、お定は大事相に胸に抱いて、仍やはり且



郷里くにの事を思ひながら主家に帰つた。勝手口から入ると、奥様が見えぬ。お定は密りこつそと玉菜を出して、膝の上に載せた儘、暫時しばしは飽かずも其香を嗅いでゐた。

『何してるだらう、お定は？』と、直ぐ背後うしろから声をかけられた時の不愜ふびんさ！

朝餐あさめしご後の始末を兎に角に終つて、旦那様のお出懸に知らぬ振をして出て来なかつたと奥様に小言を言はれたお定は、午前十時頃、何を考へるでもなく呆然ぼんやりと、台所の中央まんなかに立つてゐた。

と、他所行よそゆきの衣服を着たお吉が勝手口から入つて来たので、お定は懐かしさに我を忘れて、『やあ』と声を出した。お吉は些ちよつと

笑顔を作つたが、

『まあ大変な事になつたよ、お定さん。』

『怎したべす？』

『怎したも恚うしたも、お郷里くからお前さん達の迎へが来たよ。』

『迎へがすか？』と驚いたお定の顔には、お吉の想像して来たうらはらと反対に、何ともいへぬ嬉しさが輝いた。

お吉は暫時呆れた様にお定の顔を見てゐたが、

『奥様は被居いらつしやるだらう、お定さん。』

お定は頷いて障子の彼方を指した。

『奥様にお話して、これから直ぐお前さんを伴れてかなげやならないのさ。』

お吉は、お定に取次を頼むも面倒といった様に、自分で障子に手をかけて、『御免下さいまし。』と言つた儘、中に入つて行つた。お定は台所に立つたなり、右手を胸にあてて奥様とお吉の話をして洩れ聞いてゐた。

お吉の言ふ所では、迎への人が今朝着いたといふ事で、昨日上げた許りなのに誠に申訳がないけれど、これから直ぐお定を歸してやつて呉れと、言葉滑らかに願つてゐた。

『それはもう、然ういふ事情なれば、此方で置きたいと言つたつて仕様がなない事だし、伴れて歸つても構ひませんが、』と奥様は言つて『だけどね、<sup>やうや</sup>漸つと昨晩来た許りで、まだ一昼夜にも成らないぢやないかねえ。』

『其処ン所は何ともお申訳がございませぬのですが、何分手前共でも迎への人が来ようなどは、些ちつとも思懸けませぬでしたので。』

『それはまあ仕方ありませんさ。だが、郷里くにといつても随分遠い所でせう？』

『ええ、ええ、それはもう遙ずつと遠方で、南部の鉄瓶を拵へる所よりも、まだ余程田舎なさうでございます。』

『其 処からまあ、よくねえ。』と言つて、『お定や、お定や。』

お定は、怎やら奥様に済まぬ様な気がするので、怖るゝ行つて坐ると、お前も聞いた様な事情だから、まだ一昼夜にも成らぬのにお前も本意ないだらうけれども、この内儀さんと一緒に帰つ

たが可からうと言ふ奥様の話で、お定は唯顔を赤くして堅くなつて聞いてゐたが、聽てお吉に促されて、言葉寡すくなに礼を述べて其家を出た。

戸外へ出ると、お定は直ぐ、

『甚どんな 人だべ、お内儀さん?』と訊いた。

『いけ好かない奥様だね。』と言つたが、『迎への人かえ? 何とか言つたつけ、それ、忠吉さんとか忠次郎さんとかいふ、禿頭の腹の大でっかい人だよ。』

『忠太ツて言ふべす、そだら。』

『然うく、其忠太さんさ。面白ことばい語な人だねえ。』と言つたが、

『来なくても可いのに、お前さん達許り詰らないやね、態々出て

来て直ぐ伴れて帰られるなんか。』

『真ほんに然うでござんす。』と、お定は口を噤つぶんで了つた。

稍あつてから再また、『お八重さんは怎したべす?』と訊いた。

『お八重さんには新太郎が迎ひに行つたのさ。』

源助の家へ帰ると、お八重はまだ帰つてゐなかつたが、腰までしか無い短い羽織を着た、布袋の様に肥つた忠太老爺おやぢが、長火鉢に源助と向合つてゐて、お定を見るや否や、突然、

『七日八日見ねえでる間うちに、お定ツ子ア遙ぐっと美え女子をなごになつた喃なあ。』と、四辺構はず高い声で笑つた。

お定は路々、郷里くにから迎ひが来たといふのが嬉しい様な、また、其人が自分の嫌ひな忠太と聞いて不満な様な心地もしてゐたので

あるが、生れてから十九の今まで毎日々々聞き慣れた郷里くに言葉を其儘に聞くと、もう胸の底には不満も何も消えて了つた。

で、忠太は先づ、二人が東京へ逃げたと知れた時に、村では両親初め甚に驚かされたかを語つて、源助さんの世話になつてゐなれば心配はない様なものの、親心といふものは又別なもの、自分も今は急がしい盛りだけれど、強ての頼みを辞いなみ難く、態々迎ひに来たと語るのであつたが、然し一言もお定に對して小言がましい事は言はなかつた。何故なれば忠太は其实、矢張り源助の話を聞いて以来、死ぬまでには是非共一度は東京見物に行きたいものと、家には働手が多勢ゐて自分は閑ひまじん人なところから、毎日考へてゐた所へ、幸ひと二人の問題が起つたので、構はずにや置か

れぬから何なら自分が行つて呉れても可いと、不取敢氣とりあへずの小さい兼大工を説き落し、兼と二人でお定の家へ行つて、同じ事を遠廻くどくどしに詳々と喋り立てたのであるが、母親は流石に涙顔をしてゐたけれども、定次郎は別に娘の行末を悲観してはゐなかつた。それを漸やうやう々納得させて、二人の帰りの汽車賃と、自分の片道だけで可いといふので、兼から七円に定次郎から五円、先づ体の可い官費旅行の東京見物を企てたのであつた。

纏てお八重も新太郎に伴れられて歸つて来たが、坐るや否や先づ険しい眼尻を一層険しくして、凝じつと忠太の顔を睨むのであつた。忠太は、お定に言つたと同じ様な事を、繰返してお八重にも語つたが、お八重は返事も碌々せず、脹ふくれた顔をしてゐた。



源助の忠太に対する驩もてなし待振ぶりは、二人が驚く許り奢おごつたものであつた。無論これは、村の人達に伝へて貰もらひたい許りに、少許すこしは無理な事までして外見みえを飾つたのであるが。

其夜は、裏二階の六畳に忠太とお八重お定の三人枕を並べて寝せられたが、三人限になると、お八重は直ぐ忠太の膝をつねりながら、

『何なんしや来たす此人しとア。』と言つて、執念しふねくも自分等の新運命を頓挫させた罪を詰るのであつたが、晚酌ばんしやくに陶然とした忠太は、間もなく高い躰いびきをかいて、太平の眠に入つて了つた。するとお八重は、お定の穩おとなしくしてるのを捉まへて、自分の行つた横山様が、何とかいふ学校の先生をして、四十円も月給をとる学士様な事や、

其奥様の着てゐた衣服きものの事、自分を大層可愛がつてくれた事、それからそれと仰々しく述べ立てて、今度は仕方がないから帰るけれど、必ず再また自分だけは東京に来ると語つた。そしてお八重は、其奥様のお好みで結はせられたと言つて、生れて初めての廂髪に結つてゐて、奥様から拝領の、少し油染みた、焦こげ櫛おりいぶ櫛いぶのリボンを大事相に挿してゐた。

お八重は又、自分を迎ひに来て呉れた時の新太郎の事を語つて  
『那あんな 親切な人ア家えの方にや無ねえす。』と讚めた。

お定はお八重の言ふが儘に、唯穩しく返事してゐた。

その後二三日は、新太郎の案内で、忠太の東京見物に費された。お八重お定の二人も、もう仲々来られぬだらうから、よく見て行

けと言ふので、毎日其随伴おともをした。

二人は又、お吉に伴れられて行つて、本郷館で些少ささやかな土産物をも買ひ整へた。

## 十一

お八重お定の二人が、郷里を出て十二日目の夕、忠太に伴れられて、上野のステイションから帰郷の途に就いた。

貫通車の三等室、東京以北の諸あらゆる有国々の訛を語る人々を、ぎつしりと詰めた中に、二人は相並んで、布袋の様な腹をした忠太と向合つてゐた。長いく、プラツトフォームに数限りなき掲燈あかりが

昼の如く輝き初めた時、三人を乗せた列車が緩やかに動き出して、秋の夜の暗やみを北に一路、刻一刻東京を遠ざかつて行く。

お八重はいはずもがな、お定さへも此時は妙に淋しく名残惜しくなつて、密々こそこそと其事を語り合つてゐた。此日は二人共廂髪に結つてゐたが、お定の頭にはリボンが無かつた。忠太は、棚の上の荷物を氣にして、時々其を見上げくししながら、物珍らし相に乗合の人々を、しげく見比べてゐたが、一時間許り経つと、少し身体を曲かがめて、

『尻けつア痛くなつて来た。』と呟いた。『汝うなア痛くねえが？』

『痛くねえす。』とお定は囁いたが、それでも忠太がまだ何か話欲しさうに曲かがんでるので、

『家の方でヤ玉菜だの何ア大きくなつたべなす。』

『大きくなつたどもせえ。』と言つた忠太の声が大きかつたので、  
あたり周囲の人は皆此方を見る。

『汝うなア共どア逃げでがら、まだ二十日にも成んめえな。』

お定は顔を赤くしてチラと周囲を見たが、その儘返事もせず俯うつむいて了つた。お八重は顔を蹙いまいまめて厭いや々まし気に忠太を横目で見てゐた。

十時頃になると、車中の人は大抵こくり／＼と居睡を始めた。

忠太は思ふ様腹を前に出して、グツと背後うしろに凭たれながら、口を開けて、時々軒をかいてゐる。お八重は身体を捻つて背中合せに腰

掛けた商人体の若い男と、頭を押接けた儘、眠つたのか眠らぬのか、凝としてゐる。

窓の外は、機関車に悪い石炭を焚くので、雨の様な火の子が横様に、暗を縫うて後方に飛ぶ。懐手をして、円い頤を襟おとがひに埋めて俯いてゐるお定は、郷里くにを逃げ出して以来の事をそれからそれと胸に数へてゐた。お定の胸に刻みつけられた東京は、源助の家と、本郷館の前の人波と、八百屋の店と、への字口の鼻先が下向いた奥様とである。この四つが、目眩めまぐろしき火光あかりと轟々たる物音に、遠くから包まれて、ハツと明るい。お定が一生の間、東京といふ言葉を聞く毎に、一人胸の中に思出す景色は、恐らく此四つに過ぎぬであらう。

臆<sup>やが</sup>てお定は、懐手した左の指を少し許り襟から現して、柔かい  
 己が頬を密<sup>そつ</sup>と撫でて見た。小野の家で着て寝た蒲団の、天鷲絨の  
 襟を思出したので。

瞬く間、窓の外が明るくなつたと思ふと、汽車は、トある森の  
 中の小さい駅を通過<sup>パッス</sup>した。お定は此時、丑之助の右の耳<sup>みみたぼ</sup>朶の、  
 大きい黒子を思出したのである。

新太郎と共に、三人を上野まで送つて呉れたお吉は、さぞ今頃、  
 此間中は詰らぬ物入をしたと、寝物語に源助にこぼしてゐる事であらう。

(了)

〔生前未発表・明治四十一年五月〜六月稿〕





# 青空文庫情報

底本：「石川啄木全集 第三卷 小説」筑摩書房

1978（昭和53）年10月25日初版第1刷発行

1993（平成5年）年5月20日初版第7刷発行

※生前未発表、1908（明治41）年5～6月執筆のこの作品の本文を、底本は、土岐善麿氏所蔵啄木自筆原稿によっています。

※「櫓の14かく目の「一」が「、」は「デザイン差」と見て「櫓」で入力します。

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2008年10月28日作成

2012年9月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 天鷲絨

石川啄木

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>